

旧約聖書 イザヤ書 25章6節—9節 (新共同訳)

⁶万軍の主はこの山で祝宴を開き／すべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。⁷主はこの山で／すべての民の顔を包んでいた布と／すべての国を覆っていた布を滅ぼし／⁸死を永久に滅ぼしてください。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい／御自分の民の恥を／地上からぬぐい去ってください。これは主が語られたことである。⁹その日には、人は言う。見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってください。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう。

新約聖書 使徒言行録 10章34節—43節 (新共同訳)

³⁴そこで、ペトロは口を開きこう言った。「神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました。³⁵どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。³⁶神がイエス・キリストによって——この方こそ、すべての人の主です——平和を告げ知らせ、イスラエルの子らに送ってくださった御言葉を、³⁷あなたがたはご存じでしょう。ヨハネが洗礼を宣べ伝えた後に、ガリラヤから始まってユダヤ全土に起きた出来事です。³⁸つまり、ナザレのイエスのことです。神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました。イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのですが、それは、神が御一緒だったからです。³⁹わたしたちは、イエスがユダヤ人の住む地方、特にエルサレムでなさったことすべての証人です。人々はイエスを木にかけて殺してしまいましたが、⁴⁰神はこのイエスを三日目に復活させ、人々の前に現してくださいました。⁴¹しかし、それは民全体に対してではなく、前もって神に選ばれた証人、つまり、イエスが死者の中から復活した後、御一緒に食事をしたわたしたちに対してです。⁴²そしてイエスは、御自分が生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、力強く証しするようと、わたしたちにお命じになりました。⁴³また預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる、と証ししています。」

新約聖書 マルコによる福音書 16章1節—8節 (新共同訳)

¹安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。²そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。³彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。⁴ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。⁵墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座しているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。⁶若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。⁷さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」⁸婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

説教「復活」

教会讃美歌 89 番、教会讃美歌 90 番

本日の福音書は、「安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った」という場面から始まります。

ユダヤ教の安息日は、現代の土曜日であり、また当時の一日の始まりは日没なので、これは、現在の時間と曜日感覚で言えば土曜日の夕暮れ以後ということになります。またイエスが墓に葬られたのは安息日の前日であるので、遺体が墓に安置されてから丸一日以上経過した後に買ったということになります。

彼女たちは、逃げ去っていなくなった男性の弟子たちの役割を継承しています。この女性たちは、イエスが十字架上で死ぬのを見守り、墓に納められる様子を見つめていました。彼女たちは「イエスに油を塗りに行くために香料を買った」とありますが、その「香料」とは、遺体への葬りに用いるものです。安息日に店は閉まっていますから、「買った」とは、安息日が終わっていることを示しています。買った目的は「イエスに油を塗ること」で、これは死者の装いを整える行為です。

女性たちは最後の最後までイエスに従おうとしていた、そこから、本日の福音書は始まるのです。

三人の女性たちはこう話し合っていました。「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」。

この言葉には、女性たちが、その石に関して、人間的な支えや助けを求めていたことが示されています。

彼女たちは、イエスの墓が大きな石で封印されていたと知っていましたが、どうやってその石を転がして墓を開けるのか、何の手立てもありませんでした。石についてのそのような不安を持ちながら歩んだということは、それに対する準備など全くしないまま、とにかく急いで彼女たちがやって来たということでしょう。

しかし、石は既にわきへ転がしてありました。彼女たちが到着する前にです。女性たちは、イエスに油を塗るために墓の中に入ります。

「墓に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座しているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた」とあります。

「白い長い衣を着た若者」は、天使を指しています。

天使は、女性たちにイエスの復活を告げます。「あの方は復活なさって、ここにはおられない」。

「復活なさって」という日本語訳は正確でなく、原文は「復活させられた」という受け身の形です。イエスは自分で復活したのではなく、神がイエスを復活させたのです。

天使は、今度は女性たちを、イエスの復活を告知するための使い、すなわち使者としています。神は復活の出来事を、弟子たちよりも、まず女性たちに知らせ、女性たちを通して弟子たちにそれを知らせようとされたのです。

「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい」と、弟子の中でも特にペトロに言及していることから、十字架の受難の時、恐れによってペトロが三度イエスを否認した話が思い起こされます。

イエスを否定したペトロにとっても、イエスを見捨てたすべての弟子たちにとっても、これで終わりではないのです。イエスとの交わりが回復されることを通して成就される、神の憐れみと赦しの新しい時代が今や近づいたのです。

ですが女性たちは、使者の役目を託されながら、その時点ではそれを果たすことができませんでした。天使の告げたことが、あまりにも超自然的で、人の思いを超えており、驚きというよりも、むしろ恐ろしくさえあったからです。

福音書記者マルコは「恐ろしかったからである」という言葉をもって、唐突とも思える仕方で叙述を打ち切っています。そしてこのマルコ福音書では、後生の付加と考えられる括弧付きで記述された部分（16:9-20）を除くと、他の福音書とは異なり、弟子たちと復活したイエスの再会そのものは記されていません。つまり、マルコ福音書は、空の墓の出来事が婦人たちにとって恐ろしかった、という記述で終わっていたのです。

ところが後の時代、マルコ福音書が書かれてから 1～2 世紀後に、復活したイエスが女性たちや弟子たちに表れるという 16 章 9 節以下の部分がマルコ福音書に書き加えられました。当然、その書き加えをした人は、福音書記者マルコとは別の人です。なぜ書き加えをしたかという点、キリスト教信仰にとって復活は大事な出来事ですから、福音書に復活したイエスが現れた記事がないのはまずい、と考えたからです。日本語訳聖書でも、書き加えられたことを表すために、聖書本文の 9 節以下には括弧が付いています。

マルコは、十字架で死んだナザレのイエスが甦り、弟子たちはガリラヤで復活のイエスと出会えるだろうという天使の告知だけを記し、重要な部分であると思われるその後のこと、弟子たちがイエスと実際に出会った場面については書

いていないのです。

天使は、こう告げました。「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる」。

ガリラヤは、イエスがその活動を開始し、弟子たちを召し出した場所です。弟子たちは、かつての出会いの場所で復活のイエスに会うのです。復活のイエスは、かつてのようにガリラヤで弟子たちに会い、「私について来なさい」と呼びかけ、再び彼らと共に救いの業を始めるでしょう。

「ガリラヤでお目にかかれる」という天使の言葉は、福音書のはじめに帰っていくことだと言えるかもしれません。福音書が伝えるイエスの言葉や行いが過去のことでなく、今も私たちの中に生きて働くイエスが福音を語り、救いの業を行っているのです。

墓にいた天使は、墓から、復活したイエスと弟子たちとのガリラヤでの再会へと、私たちの目を向けさせます。イエスのいない空っぽの墓は、生けるイエスと弟子たちとの新しい出会いを指し示す道しるべとなっています。

ここには、弟子たちに対するイエスの無償の愛が示されています。イエスは墓をもぬけの空にして、弟子たちのもとに訪れたのです。弟子たちがイエスを見捨てても、イエスは弟子たちを見捨てません。

イエスが復活し空っぽになったイエスの墓は、大いなる祝福と「肉体と死を越えた完全なる自由」が象徴されているように思います。

肉体を持ち、この世に生きている以上、人間は完全に自由になることはできないでしょう。イエスの弟子たちもそうであったように、いつも何かに心が縛られ、何かに心がとらわれているかもしれません。

苦しい時は、口に出してこう祈ってみてください。

「イエス様、私を助けてください」。

他者のために祈るのも尊いことですが、イエス・キリストと一対一で、自分のために祈ってください。

私たちと同じ人間の肉体を持つ、神の子、主イエス・キリストを賛美しましょう。